

モンゴメリ著、村岡花子訳「アンをめぐる人々—赤毛のアン・シリーズ 8—」新潮文庫、新潮社 2008年3月20日刊を読む

アンをめぐる人々—セーラの行く道—

お茶がすむと、セーラはミルク壺つぼの中身をすっかり皿さらにあけ、
「あたしの猫ねこにやってくるわ」

と言って部屋を出ていった。

「あの子には負けましたよ」と、エバン夫人は当惑顔どうわくがおで吐息といきをついた。「ほら、うちに二年もいるあの黒猫を知ってなさるわね？ エバンとわたしははじめから、あれをかわいがっていたんですが、セーラときたらあの猫が大嫌いらしくてね、あの子が家にいるときにゃ、猫はおちおちストーブの下で昼寝ひるねもできやしない——外へ出てかなくちゃならなかったんですよ。ところが、しばらく前に、ふとしたことから足を折ってしまったもので、わたしらは殺しちまわなくてはと思ったのだけれど、セーラがなんとしても聞きいれないでね、副木ふくぼくを持ってきて上手じょうずに足にあてて、包帯でしばってやり、それ以来、まるで病気の赤ん坊ぼうのように世話してやってるんですよ。猫もいまじゃよくなって、贅沢ぜいたくな暮らしをしてますよ、あの猫は。これがセーラのやり方なんでね。病気の雛ひながいるけれどここ一週間も薬やなんかいろいろあてがって看護さっちゆうざいしてますよ！ それから、殺虫剤にかぶれてみじめな姿になった、あの子牛かちくをほかの家畜全部より大事にしているんだからね」

P198 ~ 199

「なに、こうなるはずでしたよ」と、エバン夫人がさかし気に言った。「いつものセーラのやり方だもの。なにかが病気になったり、ふしあわせになったりすると、あの子はそれに打ちこんじまうようだったからね。だから、ライジ・バクスターの失敗が結局は成功したわけですよ」

P211

[コメント]

「アンをめぐる人々」は美しいカナダや北アメリカ大陸の自然の下、愛と涙、人間味あふれる 15 の物語。ペーソス(哀れみや悲しみなどの感情を喚起する性質)がぎっしり詰まっている。作品も胸に突き上げてくるものがある。

— 2015年5月6日 林 明夫記 —